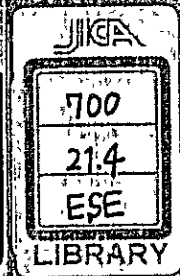


南米日系社会における 老人問題の講演・指導に関する報告

昭和58年2月

国際協力事業団
移住事業部



南米日系社会における 老人問題の講演・指導に関する報告

昭和58年2月

国際協力事業団

移住事業部

JICA LIBRARY



1053170[5]

移海住

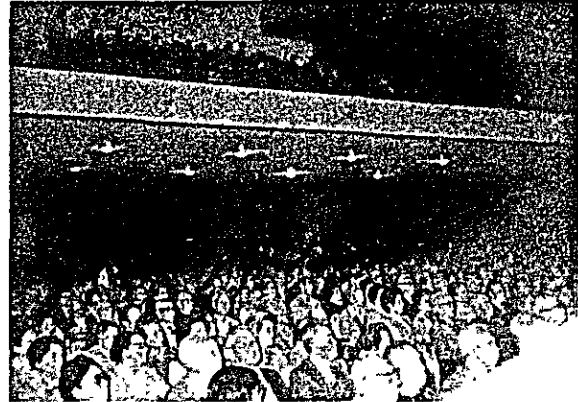
J R

83 - 2

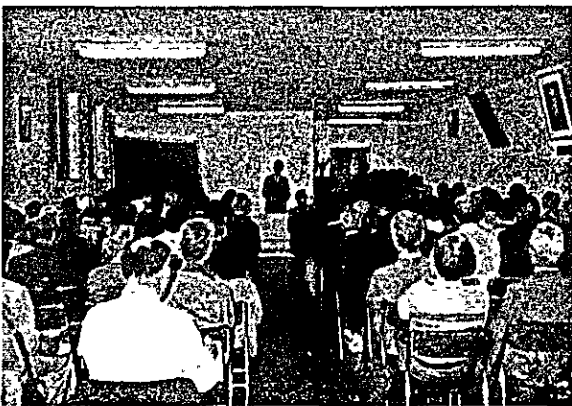
国際協力事業		
受入 月日	'84. 4. 13	700
		21.4
登録No.	03320	EJF



① 第13回老人週間講演会(於:文化協会記念講堂) 9/22,23



② 第13回老人週間講演会(於:文化協会記念講堂)に聴き入る大観衆 9/22,23



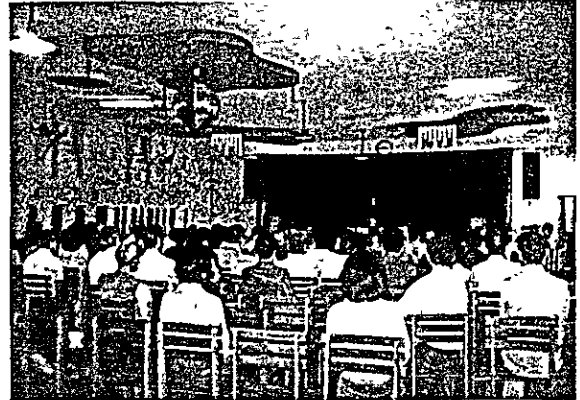
③ 老人クラブ指導者研修会(於:青森県人会館サンパウロ) 9/24



⑤ 老人クラブ研修会(於:ラッパ日本人会館) 9/25



⑤クリチーバ市での講演会（於：クリチーバ日伯文化協会会館） 9/28



⑥ロンドリーナ市での講演会（於：日本人会館） 9/29



⑦イポチ移住地講演会（於：文化体育協会会館） 10/2



⑧ウルキッサ移住地講演会（於：公民館） 10/4

↑



⑨ブエノス・アイレス市での講演会（於：亜拓会館） 10/5



⑩サンタ・クルス市での懇談会（於：サンタ・クルス支部2F） 10/8



⑪リマ市での講演会（於：日本文化会館） 10/9

は じ め に

この報告書は、南米のブラジル、アルゼンティン、ボリヴィア、ペルーの日系社会における老人問題に関する講演・指導及び日系福祉団体との意見交換の結果をとりまとめたものである。

今回の講演・指導は前年度に引き続き、日系老人クラブの育成指導等、いわゆる生き甲斐対策に重点をおき、元東京都教育長佐藤文男氏の協力を得て、その目的を達成することができた。

53年度から実施した調査報告によって、日系老人の実態、福祉に関する問題点等が把握されたが、今後とも高齢化社会が進む南米諸国日系社会の老人問題についての認識を深める一助となれば幸いである。

昭和58年2月

移住事業部長

目 次

はじめに

第 1 篇	講演指導の意義と日程	1
1.	今回の派遣団の目的	1
2.	対象国	1
3.	総日程	1
4.	派遣団員氏名	4
5.	主な講演会回数, 動員数	4
6.	各地講演会一覧表	5
7.	昭和53～57年度派遣団訪問地	7
第 2 篇	老人問題の講演と老人クラブの育成指導	8
1.	第13回老人週間における講演要旨	8
2.	第13回老人週間における講演内容	9
3.	各地講演会質疑内容	18
	あ と が き	21

第 1 篇 講演指導の意義と日程

1. 今回の派遣団の目的

日系一世の高齢化が徐々に顕在化してきたことにより、昭和53年度に第1回調査団を派遣して以来、老人問題の講演・指導及び調査を4回にわたり毎年度継続実施してきた。

本年度はこれらの実績をもとに中堅層、青年層も参加する形で老人問題の講演、意見交換、老人クラブ活動の奨励と育成指導を行うことにより老人問題の認識を促しその福祉実現に地域ぐるみで対応する機運の醸成に資する。

※ 参考までに既往の関係報告書を下記に掲げておく。

昭和54年 2月	南米三ヶ国の日系社会における老人問題に関する予備調査の結果報告	(業務資料№530)
昭和54年 12月	南米五ヶ国の日系社会における老人問題に関する調査指導の結果報告	(業務資料№541)
	(附)ブラジル国日系老人クラブ活動調査報告	
昭和55年 6月	南米五ヶ国日系老人生活実態に関するアンケート調査報告	(業務資料№571)
昭和56年 2月	南米日系社会における老人問題の講演指導と調査の報告	(業務資料№599)
昭和57年 1月	南米日系社会における老人問題の講演指導に関する報告	(業務資料№636)

2. 対象国

今回派遣団が訪問した国は

ブラジル、アルゼンティン、ボリヴィア、ペルーの4ヶ国

※ ボリヴィアはアルゼンティンから予定していたフライト便が突然なくなったため、当初予定していた同国のサンファン・オキナワ移住地を訪問できなかった。

3. 総日程

9月20日(月)午後5時30分	成田発(ロス、リマ、リオ経由)
21日(火)午前10時30分	サンパウロ着
午後1時	サンパウロ支部にて日程打合せ
3時	サンパウロ日伯援護協会、救済会、サンパウロ新聞記者と打合せ
22日(水)午後1時	第13回老人週間講演会(第1日目)

	参加者 1,500名 (於 文化協会記念講堂)
	演題“老後生活に知恵を生かそう”
23日(木)午後1時	同上(第2日目)
	参加者 1,500名 (於 文化協会記念講堂)
	演題“老後のしあわせを地域ぐるみで”
24日(金)午前8時30分	老人ホーム憩の園(救済会経営), 精神障害者社会復帰施設やすらぎホーム(日伯援護協会経営)訪問
	午後1時
	老人クラブ指導者研修会(於 青森県人会)
	参加者 38団体 110名
25日(土)午前9時45分	福祉事業実務担当者との懇談会(於 援協事務所内) 参加者 11名
	午後1時
	老人クラブ研修会(於 ラノバ日本人会館)
26日(日)午前10時	サントス厚生ホーム(日伯援護協会経営)訪問 資料整理
27日(月)午後0時	パウリスタ・サンパウロ新聞社記者との懇談会
	午後5時30分
	サンパウロ発(VP134便クリチーバ行)
	午後6時30分
	クリチーバ着
28日(火)午前9時	クリチーバ総領事表敬訪問 クリチーバ支所と日程打合せ
	午後2時30分
	クリチーバ市講演会(於 クリチーバ日伯文化協会々館) 参加者 23名
29日(水)午前7時	クリチーバ発(TRANS BRASIL)
	午前8時
	ロンドリーナ着 地元TV局(GLOBO)取材
	午前10時
	厚生会学生寮訪問
	午後3時30分
	ロンドリーナ市講演会(於 ロンドリーナ日本人会館) 参加者 200名
30日(木)午前8時	ロンドリーナ発(TRANS BRASIL)
	午前9時
	クリチーバ着
	午後4時40分
	クリチーバ発
	午後6時30分
	ポルト・アレグレ着
10月1日(金)午前9時	在ポルト・アレグレ総領事館表敬訪問
	午前9時30分
	成人病研究所森口所長の案内でポルト・アレグレ市内老人ホーム6ヶ所訪問

	(1) Casa dos Amigos de Santo Antonio
	(2) Lociedade Las Vicente de Paula № 3.
	(3) " " " № 2.
	(4) Soceedade L. Vicente de Paula № 1.
	(5) Las Otilia Chaves (Lions Club)
	(6) Casa de Maria de Nazaré
午後2時	ボルト・アレグレ市講演会(於 南日伯援協会館) 参加者19名
10月2日(土)午前10時30分	イボチ移住地へ出発
午後1時30分	イボチ移住地着
午後2時	イボチ移住地講演会(於 イボチ日伯文化体育協会々館) 参加者23名
3日(日)午後8時25分	ボルト・アレグレ発(SC 930便)
午後9時45分	フエノスアイレス着
4日(月)午前9時30分	フエノスアイレス支部と業務打合せ 在亜日本大使館表敬訪問 日会共済会訪問
午後3時30分	ウルキノサ移住地講演会(於 ウルキッサ公民館) 参加者21名
5日(火)午後4時	フエノス・アイレス市講演会(於 亜拓会館) 参加者21名
6日(水)	RQMA-VERDE 移住地農家訪問 } 6日AR-540 資料整理
7日(木)	
	にてサンタ・クルス向け出発予定が航空会社の不手際でキャンセルされ2日間足踏み
8日(金)午後2時45分	フエノスアイレス発(LB 914)
午後5時	サンタ・クルス着
午後5時30分	日本人会幹部との懇談会(於 サンタ・クルス支部) 参加者7名
9日(土)午前8時20分	サンタ・クルス発(LB 918)
午前11時30分	リマ着
午後3時	リマ市講演会(於 日秘文化会館サロン) 参加者11名
10日(日)	資料整理
11日(月)午前5時	リマ発 PL 622)
12日(火)	メキシコ・ンティ経由(JL 011)

4. 派遣団員氏名

- 佐藤 文 男 (元東京都教育長, 都民生活局長)
- 半谷 良 三 (移住事業部海外事業課職員)

5. 主な講演会回数・動員数

今年度の場合、昨年と同様ひとまず老人問題の生活実態調査、文化資源需要調査、老人福祉・施策調査等老人問題補完対策の企画に必要な各種の調査の実施を終えたものとして講演・指導を中心に行った。特に日程的には恒例となったサンパウロ老人週間の講演に過去の経緯から例年同様重点をおいてスケジュールを組んだ。

今回の訪問地における講演回数と同員数は別表のとおりである。昨年と同じ講演回数にもかかわらず動員数が上回ったことは、特にサンパウロ老人週間がサンパウロとその近郊地域だけでなく、伯国日系人社会の中で広く定着したことによるところが大きいと思われる。

それは2日間の講演で3,000人を集めた数字が示すとおりであり、また老人週間3日目のスケジュールとして各地区の単位老人クラブの指導者研修会にもリーダーたちだけで110名を集めたことから、老人問題への関心の高まりとこれらを主催した日系3団体(サンパウロ抜協, 老人クラブ連合会, 救済会)の組織的基盤の強さがうかがえる。

国名	ブラジル		アルゼンティン		ポリヴィア		ペルー		計	
	回数	動員数	回数	動員数	回数	動員数	回数	動員数	回数	動員数
サンパウロ 老人週間講演	2	約3,000名							2	約3,000名
老人クラブ 指導者研修会	1	110							1	110
福祉事業実務 担当者との懇談会	1	11							1	11
老人クラブ研修会	1	61							1	61
日本人会(幹部含む) 都市及び近郊	3	242	1	21	1	7	1	11	5	281
日本人会 移住地	1	25	1	21					2	46
計	9	3,449	2	42	1	7	1	11	13	3,508

※(参考)昨年度の講演回数: 13回, 動員数: 3,263名

6. 各地講演会一覽表

1. 場	サンパウロ老人文化協会記念堂			サンパウロ支部管内			(クリチナーバ支所)		
	サンパウロ老人週間(第1日目)	サンパウロ老人週間(第2日目)	老人クラブ指導者研究会	福祉事業実務担当者との懇談会	老人クラブ研修会	クリチナーバ市講演会	ロンドンリーナー市講演会		
2. 日	9月22日 13:00~14:30	9月23日 13:00~14:30	9月24日 13:00~16:00	9月25日 9:45~11:20	9月25日 13:00~16:15	9月28日 14:30~17:00	9月29日 15:30~17:00		
3. 参加者数	約1,500名	約1,500名	110名 老人クラブ38団体の指導的立場の人参加	11名 日系3団体の会長、事務局長参加	61名 老人クラブ等11団体の一般会員参加	23名 “壮年会”(老人クラブ)の役員、一般会員参加	約200名 ロンドンリーナー市近郊の日系人参加		
4. 講演内容	演題 「老後生活に 知恵を生かそう」	演題 「老後のしあわせを 地域ぐるみで」	①老人クラブ指導者の力の種類 ②老人クラブの社会への理解 ③人材銀行 ④現地学校の解放	①アノソルの感想 社会福祉事業の感想 ②フラソル日系福祉事業の日本への紹介の必要性 ③日本の老人クラブとの交流 等々 (質問・意見) ①致済会幹部は2世のため、2世の考え方で1世に対する福祉をやっている。 ②福祉団体の後継者育成の方策 等々	①老人クラブが行うべきこと (1)自分たちの教養・知識を高める活動 (2)自分たちの健康保持を仲間でやる。 (3)レクリエーションを楽しむ活動 (4)地域社会との交流 ②分団討議 参加者を5班に分けて、各々に1つづつテーマを与えて話し合い発表。それに対する先生の講評	①市民交流の必要性 ②日本の世界の長寿の秘訣 ③年をとると落ち入りやすい傾向 ④地域社会への老人問題の醸成 ⑤ボランティアの担い手を育てる。 ⑥人材銀行を老人クラブに作る。 ⑦昔くという事は頭の老化を防ぐ。 質問特になし	同 左 (質問) ①植物人間とはどう いうことか? ②ブラソルの場合 親と子は別居する 傾向が強い。 ③ブラソルの老人は 宗教活動をしてい る。 ④養老施設の理念は		
5. 質問事項									

	ボルト・アレグレ市 講 演 協 会 館	グレン支那管内 イボチ移住地 講 演 協 会	フェノサ・ア 講 演 協 会 館	フエノサ・ア 講 演 協 会 館	サント・クルス支那管内 日本人会幹部 講 演 協 会 館	リマ事務所管内 リマ市 講 演 協 会 館
1. 場 所	ボルト・アレグレ市 講 演 協 会 館	グレン支那管内 イボチ移住地 講 演 協 会	フェノサ・ア 講 演 協 会 館	フエノサ・ア 講 演 協 会 館	サント・クルス支那管内 日本人会幹部 講 演 協 会 館	リマ事務所管内 リマ市 講 演 協 会 館
2. 日 時	10月1日 14:00~17:20	10月2日 14:00~17:30	10月4日 15:30~17:30	10月5日 16:00~18:30	10月8日 17:30~19:30	10月9日 15:00~18:00
3. 参 加 者 数	19名	25名 中年層の参加多	21名 移住地の中堅層、若 年層も参加	21名 クルマ老人クラブ、 明春会のメンバー 参加	7名 日本人会の役員参加	11名 日本人会幹部参加
4. 講 演 内 容	①日本人が世界一の 長寿国になった理 由 ②年寄りの落ち入り やすい傾向 ③老人以外の人を老 人問題を考えるた めに ④施設建設、都市計 画、町作りは老人 の事を考えること ⑤人材銀行の設立 ⑥伯国の言語、歴史 を勉強し直す ⑦西暦2000年の 老人像 (質問)	①デート・ポールの ルールを覚えてほ しい (支那を通じてル ールブックを送付 する) ②老人のなまり場を つくりたい	(質問) ①息子が結婚して独 立するとクラブ活 動から退き活動 しなくなる老人が 多い	(質問) ①明春会は組織的に 未熟で、会に集 まれる老人はしあ わせである ②クルマ老人クラブ は若い人も交えて 楽しくやっている ③県から敬老金の支 給を受けている	(質問) ①海外に居る日系老 人にも日本の社会 福祉の恩恵にあず かるようしてもら いたい ②我々老人クラブの 参考になる資料を 送ってもらいたい	(質問) ①日本の今の社会福 祉制度は、ペルー からみるとよく整 備されている ②日本では、医療無 料化で病院にいく 人が増えている か? ③デート・ポールの ルールブックと器 具を送ってほしい
5. 質 問 事 項	①長寿国が北半球に かたよっている理 由は ②サンパウロの老人 活動の感想は ③日本では女性の方 が長寿だがその原 因は					

7. 昭和53年度～57年度 派遣団訪問地

	ブラジル						アルゼンティン	パラグアイ				ボリビア			ペルー	米 国	
	サンパウロ 及び近郊	ベレノ	トメアス	ロンドリーナ	クリチーバ	ポルトアレグレ		アスンシオン 及び近郊	エンカルナシオン 及び近郊	アラム	フルト・パラナ	イグアス	サンタ・クルス	サノフアン	オキナワ		
53年度	○	○					○									○	
54年度	○	○					○			○			○	○	○	○	
55年度	○						○						○	○	○	○	○
56年度	○	○	○					○		○	○					○	
57年度	○						(含イボチ移住地) ○						○			○	○

第 2 篇 老人問題の講演と老人クラブの育成指導

1. 第 1 3 回老人週間における講演要旨

9月22日と23日の両日にわたって、サンパウロ市の文化協会記念講堂で老人週間の行事の一環として講演会が行われた。サンパウロ市の老人はもとより、遠くから泊まりがけでやって来るおとしよりも多く、両日で約3,000人の日系老人が熱心に聞き入った。

9月22日は「老後生活に知恵を生かそう」と題して

1. 私たちが生活している社会の種類

(1) 組織集団（社会団体）

a) 基礎団体

血縁的基礎団体（社会）

地縁的基礎団体（社会）

b) 派生団体

c) 社会の流れ

(2) 無組織集団（社会集合）

a) 公衆

b) 群衆

c) 社会の流れ

(3) 結 論

2. としよりの落ち入りやすい傾向

3. 老年生活の生き方

(1) 老人自身が努力してゆくこと

ア. 健康を保持する。

イ. 趣味やレクリエーションに知恵と汗を流す。

ウ. 家族や友人達と仲良くつき合ってゆくための方法を考える。

エ. 自分が社会に役立っていると思うように努力する。

(2) 家族、回りの人々、社会が努力すること。

(3) 公的機関が努力すること。

4. 結 論

という順序で講演が行われた。時間は、約2時間であった。

つぎに、9月23日は「老後のしあわせを地域ぐるみで」と題して

1. 私たちが生活している社会の種類
2. としよりの落ち入りやすい傾向
3. 老人生活を支えてゆくために、地域の理解が必要
 - (1) 地域社会が、老人と老人問題に努力する分野とその仕方
 - ア. 集会を利用して老人問題を理解し合う。
 - イ. 町や部落で、老人問題解決のために努力したいという民間人を沢山見出して、その人達に老人問題について専門的な知識を身につけて貰うよう努力する。
 - ウ. いろいろの施設を建設する時は、必ず老人のことを考えておくこと。
 - エ. 会合や集会がある時は、老人を特別に招待するとか、老人も一緒に参加して貰うように配慮すること。
 - オ. 老人を主体とした人材銀行を設立すること。
 - (2) 老人自身が地域社会の協力を求めながら、自分自身で努力すること。
 - ア. 老後という暗い考え方を捨てる。
 - イ. 自分に合った生活目標を作り、生き甲斐を見つけること。
 - ウ. 老人クラブを作り、自分達自身で運営してゆくこと。
 - 自分達の教養や知識を高める活動
 - 自分達の健康を保持するための活動
 - レクリエーションを楽しむ活動
 - 地域社会との交流をすすめる活動

4. 結 論

という順序で講演を行った。

以下に記述したものは、第1日目に行った講演のうち、導入部を除いたものの概要である。

2. 第13回老人週間における講演内容

まず、皆様方が元気で暮しておられるお姿を目の前に見て、私は大変うれしく思います。それとともに、遠い日本を離れてから、ここブラジルで長い間生活しておられる間に御苦労もあったでしょう。広大な農地を開拓された方もありましょし、また町で都市で商業活動に努力された方もありましょし。そして今日のように大きな生活の基礎をつくれ、ブラジル国民の中に日本人に対する親愛と尊敬の念を植えつけられたことに対して、私は改めて敬意を表します。

皆様方も、これ迄のすごし方を考えますとあれこれ思い出されて、万感胸に満つものがあると思いますが、それらは一つ一つ皆様方の大きな財産でありますからどうか大事にして下さい。

そしてそれ以上に、昔の思い出とはまた別に、今日とこれからの将来に向けて更に力強く歩

き出して下さい。お年をめしたとはいえ、明日、明後日とつづく将来は、皆様方の生きがいをおふやしてくれるものであり、これ迄の経験と知恵を生かしてゆけば、必ずこれ迄以上に大きなしあわせが皆様方を訪れてくれるものと信じます。

今、日本のおとしよりは昔のおとしよりと大分違ってきました。昔は、父親が息子に家督をゆずってしまったり、また母親が娘や嫁に台所や家の中の監理をゆずってしまうと、何もすることがなくなり、ひどい人になると、日なたぼっこをして終日猫を抱いていることもあります。そうになると、社会から隔絶されてしまって自分の生きがいがなくなり、身体は生きているのですが心は死んでしまって、しだいにボケてしまいます。昔は、こういうおとしよりが多かったのですが、今の日本のおとしよりは息子や嫁に家督や財産をゆずっても、今度は自分の新しい仕事やレクリエーションを求めてこれ迄とは違った生き方をするようになってきました。

講師を呼んできて、歴史や地理を皆で勉強したり、音楽や絵の勉強をしたり、食品公害（添加物、色素、味つけ等）や自動車の吐き出す排気ガスの人間に及ぼす害毒についての研究……そういったものと皆で研究し合う老人が増えてきました。

更にまた、こういう勉強だけでなく生活を楽しむために碁、将棋、テニス、ハイキング、バレエ、ゲートボール、踊り、民謡の練習やレクリエーションを楽しむグループも沢山生まれています。日本ではどちらかというとおじいさんよりもおばあさんの方がより積極的に、こういったレクリエーションや勉強に精出しているように見受けられます。

こういうことは、若い時に働くことに精一杯で、生活を楽しむことが中々できないままに今日まで来てしまったが、今漸く生活の実権を子供や孫の世代にゆずったので、これからは自分の新しい人生目標を作り直して生きてゆこう — こういう新しい生き方が、日本の老人の流行といつか、生きがいになってきつつあります。これは、今まで苦しい生活をしてきたから、その分をとりもどして楽しもうとするものではありません。これ迄とは違う生き方、生活目標に向かって力強く生きてゆこうという気がまえが生まれてきた証拠です。そしてそのために、おとしより以外の人々も、社会もそのために手助けをしようというように変わってきました。どうか皆様方も、自分から身も心もおとしよりじみた感じを持たず、新しい生き方をお互いにさがし合っていたきたいと思います。

1. としよりの落ち入りやすい傾向

年をとってきますと

- (1) 身体がたとえ健康でも、或いは病気をしなくても固くなり、自由にあちこち出かけたり若い人と一緒に飛んだりはおねたりできにくくなります。

そこで、どうしても若い人達から取り残されてしまって、老人達だけで固まらなければならぬようになりがちです。

- (2) 新しい文化、流行、デザイン、容器、食べ物等にはどうしても馴染めず、自分達が使い古してきたもの、目や耳に馴染んできた音楽、模様、衣類に愛着を感じて、次々に出て

くる新しい流行や考え方を受け入れようとしなくなります。

新しいものと古いものとの調和をはかるのが、本来としよりの社会的役割りなのですが、それをしようとしなくてこれ迄の使い馴れた道具、馴染んだ習慣、流行を大事にし、新しい道具や流行を何となく嫌がったり、使ってみようとしません。そのために、若い世代と一緒にクラブを作ってレクリエーションを楽しむ機会が少くなり、しだいに孤立化してしまいます。

こういう傾向は誰にでも一般的にあるため、老人はどうしても社会の中で堂々と楽しんだり遊んだり勉強したりするのがおっくうになりがちになります。そのために、つぎのような傾向に落ち入ります。

- (1) 不安感を持ち、何となく底抜けに明るく人生を楽しむような気持になれない。「残された人生」という消極的な考え方が優先しがちになります。病気したらどうしようかとか、息子や娘がいなくなったら誰が面倒を見てくれるのかなどという考えがしょつ中頭の中をうずまいて、どうしても明るい生活が生まれてきません。気持が何となく暗くなり、とり越し苦労が多くなります。
- (2) 昔のことばかりをやたらにしゃべったり、人に聞かせようとしがちです。としよりは昔のことを知っているが若い人は知らない。そのため昔のことを美化し、それを自慢して何度も何度も言い出すようになります。

新しいものを次々に消化せず、止まった時代のように昔のことだけを自分の財産として、それを若い人に自慢して聞かせることに大きな喜びを感じずようになります。しかも、自分が一方的にものごとをしゃべり、自分の自慢を皆が認めてくれないと大変不機嫌になったり、悲しんだりします。

「また始まった」と陰でこっそり言われたり、嫌がられたりすることが多くなります。しかも、そのことを知ろうとはしません。「愛されるとしより」に自分から積極的にならず、「嫌がられるとしより」、「グチっほいとしより」に進んでなってしまいます。

- (3) 若い人は未熟でダメだと断定し、としよりを昔のようにもっと敬愛してほしいと要求したがる傾向があります。としよりを敬愛するか否かは若い人が決めることであり、としよりが若い人に自分達のことをうやまえと要求することはおかしいと思います。うやまわれるとしよりになるためには経験、技術、考え方、思慮深い判断を持てるように自ら努力する必要があります。
- (4) としをとってきますと、一般的にひがみ 疑い深さ、しつとを持ちやすくなります。それは、例えば目、鼻、耳などの感覚がにぶくなり、ものに対する感受性が低下してきますので、はっきりと見えないため若い人のうつりとは違った感覚を持ち易く、たまには若い人の失笑を買取することもあります。「におい」も昔自分が経験した感じでそう思い込んでいることもあって、新鮮な感覚がうすれてきます。また、他の人の言うことがよく聞こ

えないために、余計な神経を使ったり、他の人から馬鹿にされたりすることもあります。

一方、社会の方も、例えばいろいろの施設や設備が、このように生理的に良えてきた老人に合わせて設計されていないものが多いように思われます。交通信号のサイクルが短いために、老人のゆったり歩く時間では向う側に安心して渡れなかったり、また目の不自由なとしよりに耳に聞こえるような信号が十分設置されていません。また階段の段差が大きいため老人の昇降を困難にしていますし、「手すり」が必ずキチンとつけられていません。また、傾斜が急過ぎて老人には無理の場合があったり、途中におどり場を設けて 休みしてもらい配慮があってもいいと思います。

こういう例はまだありますが、老人がどんどん社会の中に入って行って若い人と一緒に生活をしたくても、社会そのものがそういう受け入れがなされていない場合が多いのです。そこで、元気な老人はいざ知らず、不安なとしよりはどうしても家に引込みがちになり、孤独で他の人と接触したからなくなってしまいます。

2 老年生活の生き方

以上申し上げたことは、年をとって参りますと誰でも落ち入り易いものであるということをよく理解することが大事です。この傾向は、或る特定の人だけが落ち入り易いのではなく、誰でも年をとってくると多かれ少なかれなり易くなっていくものです。

しかし一方、他の人はそうかも知れないが、自分だけは絶対にそうはならないと思込んでいる人が多いのです。しかし、それは自分だけが思込んでいるのであって、逆にそう思込んだらそれこそ私が先程申し上げたとしよりが落ち入りやすい「独断」、「頑固」になってしまったと思うべきです。そこで、それではどう生きていったらいいのでしょうか。大変悲しいことですが、そういう傾向を持ちながらどう生きたらしあわせになるのでしょうか。それを皆様と一緒に考えてみたいと思います。

(1) 老人自身が努力してゆくこと

ア 老後という既成の考えをなくすことが肝要です。

老後というのは、人生の大半を終えてしまった「残りの人生」という意味を重く持っており、灰色になり易い。そうではなくて幼児の時、少年の時、青年時代、壮年期と並んで一つの独立した「としよりの時代」と考えるべきです。

としよりの人生そのものに価値を見つけ、としよりの人生でなければできないものを見つけ出して、そこに生きがいを作ってゆく必要があります。決して「人生の残りカス」、「残りの僅かな人生」と考えてはいけません。そういう考え方は人生や人間に対する冒とくであります。

1. 自分に見合った人生目標、生きがいを作り出す必要があります。

毎日毎日なすこともなく、起きて食事をし、ブラブラして夜寝るだけの生活では、身も心もカサカサになって人間がダメになってしまいます。疲れた時は疲れを回復す

るために休養することは必要ですが、年中フラフラと休んでいてはとしよりだけでなく若い人でも生活目標を失い、生きてゆくための指針をなくしてしまいます。そして生きてゆくためのハリを失ってしまいます。

そこで、自分の生きてゆくための目標を自ら作り、その目標を達成して生きがいを自分に言い聞かせるよう積極的な生き方に改変してゆくことが大切です。

今申し上げたことを少し具体的に例示してみますから、皆様も家に帰られたらご自分で明日から実行できるものを自分で作ってみて下さい。

a) 健康を保持することを自分の生きがいとする。

老人の「しあわせ感」の中には、必ずと言ってよいくらい健康があげられています。そこで手近な手段として、毎朝食事前に千メートルを散歩するという計画を立ててみます。勿論、この計画は医師と良く相談して決めて下さい。それは、老人だから身体が弱っているということではなくて、ものごとを判断し決定する時には、いつも科学的、合理的に決めるという習慣をつける必要があるからです。無計画に或いは感情のおもむくままに行動することは、近代社会の一員としては失格です。医師の冷静な診断によって500メートルにせよと言われたならば、千メートルの計画を半分に短縮する勇気と配慮が必要です。

そして、この散歩計画を実行したならば、グラフや記録を毎日キチンと書き込むことをおすすめします。そして途中の風景、出来事、出会った人、考えたことなどを整理して書いておいて下さい。ものを考えて書くことは老化を防ぎ、脳の働きを活発にします。こうすると途中で止めることが惜しくなり、また苦痛になるものです。そして、毎日キチンと散歩して自分の健康を確かめることに生きがいを感じるようになるものです。

散歩以外に縄飛び、家の周りの清掃、新聞配達、町や村の広報紙の配布、ラジオ体操、子供や孫の学校・幼稚園への送り迎えなど自分の仕事とし、自分が社会や家のために役立っているのだという満足感も同時に得られたならば、健康保持以外に大きな喜びも獲得できると思います。

b) 趣味やレクリエーションに汗を流し、知恵をしぼることも必要です。

将棋や碁がもっと強くなりたい、せめて初段をとりたい。踊り、歌、民謡がうまくなりたい、写真のアルバムをキレイにはり直してみたい。植木や盆栽をもっと増やしたい — こういった考えや欲求は誰にでもあるでしょうが、面倒くさいとか、はり合う人がいないとか、いい先生がいないとか案外引っ込み思案の人が多いものです。

そこで、くわず嫌いや尻込みの態度を変えて自分に合った趣味を見つけ出して、その趣味を自分の生涯の友人とし、それをのばすこと、それに没頭することを自分

の生活目標とします。

そのためには、その趣味に関する知識を深める必要があります。そこで、関係のある本を買って読んだり、図書館に通ったり、テレビやラジオの講座を聞くことも必要です。また講習会があれば出かけて研究することもよいことです。更に、いい先生について指導を受けたり、同好会を作って相互に討議したり競い合ったりすることも必要です。

これは、単に楽しむだけでなく、段位、クラス、級、賞など客観的に認知して貰えるものがあれば、それに向かって努力することもいいことです。それは、向上心につながります。

そして、この際注意しなければならないことは、決してお山の大将になってはならないということです。年若の人でもその道に關してすぐれた人ならば、教えや批判を受ける謙虚さと上位にたえず上がってゆこうとする進取の気持を持ち続けることが必要です。

こうして、自分の趣味を深めてゆくわけですが、必ず記録を取っておくことが大事です。毎日でなくても結構ですが、折にふれて書きつづり、自分の反省の材料にするという結果が生まれます。散歩の時に申し上げましたが、ものを書く習慣をつけることは、頭と身体を老化させない最も大事なことなのです。

- c) 自分1人だけで楽しむだけでなく、家族や友人と仲良くつき合っただけの方法を考えることが大切です。

家族や近所の人といっても、若い人もあり男も女もいます。また考え方や生活の時間帯の違う人もいます。そこで皆ができるような趣味やスポーツを考え、皆の賛成を得てやるのが大切です。自分だけの「我」をはらずに、皆でやれるものを考え、自分が率先して皆が参加できる機会を作ってゆく。「おじいちゃん、おばあちゃん行かない？」と言われるのではなく、「皆で行こうよ」と自分の方から積極的に言い出して皆を引っ張ってゆくように心がけて下さい。その場合、年をとっているから威張って、自分が決めたのだからという態度をとっていると長続きしません。

また、自分の作ったものの品評会をやって皆の批判を受けたり、感想や意見を聞くようにしてゆくこともいいことです。おばあさんや孫の作品も、なるべく皆で感想を述べる機会を積極的に作ってゆくようにすれば、孤独にならず、自分も皆と同じ仲間意識を持って生活してゆけます。要するに、皆とつき合える共通のものを見つけ、それをうまく利用してゆくことです。

- d) 自分が、社会や家族や町会に役立っているという自覚を持てるように努力することが必要です。

世の中は、若い元気な人が発言権があり、自分は既に社会にとって役に立っていない人間であると思いがちです。これでは、自分自身が小さくなってしまい、自分の生きがいがなくなってしまいます。

そこで、社会や家族に対して役に立つ方法、社会に奉仕できる手段を見つけて実行することです。こうして、自分と社会との距離を短くし、関係を明るくして、孤独にならないように自ら努力する必要があります。

それにはどんなことがあるでしょうか。先程も例示として申し上げましたが、孫の幼稚園や保育園の送り迎えを自分の日課としたり、町や村、或いは老人クラブの広報紙、会報の配布を自分の仕事とすることも一つの例です。また、自分の家の周りだけでなく、ドブや街路樹の手入れなどを老人達や少年達と一緒にやりことも奉仕の仕事になります。

(2) 家族、周りの人々、社会が努力すること。

老人が自分の生きがいを見つけて努力しているならば、社会も周りの人もこれに協力したり、老人が生活しやすいような環境を作ってゆくことが大切です。

そのためには、つぎのようなことが考えられます。

- a) 老人がこれ迄果たして来た努力、生き抜いてきた歴史そのものを正しく評価して、これに耳を傾けたり、老人にしゃべってもらい機会を皆で作ってゆくことが大切です。

そのためには、趣味の会、若い人のつどいがある場合には、老人を呼んで老人の話を開いたり、老人の持っている経験や知識を披露して貰うような機会を作ることできます。例えば肥料の調合、ぬかみその作り方、料理、みそ汁のうまい作り方、作物の栽培方法、天候の見方、歴史的事実の証明など老人の得意とする分野は沢山あります。

単に年をとっているからとか 長生きしているからとか 単にそういったことだけでおとしよりを尊敬するのではなく、若い人が及ばない長い年月をかけて経験した技術や知識そのもの、そしてそれを身につけた努力に敬意を払うのです。

また老人も、単に年上であるという甘えでなくて、自分の得意とする分野で社会に奉仕しようという謙虚さが必要です。

- b) とかく引っ込み思案になったり、孤独になりがちな老人をなるべく引っ張り出して一緒に集まれるような会合、レクリエーションを考えて実行することが必要です。

若い人々や社会の人が「若いも若きも」という考え方をじっくり相談し合い、そういう雰囲気づくりに努力して、自然に皆が集まれるような催し物や集会を計画すべきです。例えば盆踊り、料理講習会、運動会、教養講座等の各種講習会、碁や将棋の講習会等老人も十分にその気になれば参加できる種目を作って参加を促すようにすれば見ているだけの老人、家に引きこもって参加しない老人から、皆の仲間入りをする老人に少しでも変わって来るはずで

いろいろの会を催す時に、単に「老人席」を設けて敬老事業として招待するのではなく、皆と同じような会員、参加者として遇するように心掛けるべきです。つまり特別の人、特に大事にしなければならない人という考え方ではなくて、皆と同じような参加者という考え方を持つことが必要です。

この際、勿論老人の体力その他に耐えられないようなスポーツ — 例えば、ラグビー、サッカー、野球等は老人の参加は望めません。そういう時には、できるだけ出て観戦して貰うような配慮が必要です。そして、老人に優待券を出すとか料金を割引くとかしてできるだけ老人に米て貰えるような努力をしてほしいと思います。そして、その意味で老人を皆が忘れず、いつでも老人が社会に出やすい雰囲気をつくるようにして行っていただきたい。

- c) 老人問題についてのボランティア・ワーカーを養成することが大切です。

地区の社会福祉協議会、町内会、部落会、或いは公的には市、町、村で老人問題について奉仕したいと思う人を積極的に募り、その人々に対して専門的な教育を施すことが必要です。そして、これらのボランティア・ワーカーを通じて他の人々にも老人問題についての重要性を理解して貰うように、社会の総力をあげる努力をしなければなりません。

このワーカーのやる仕事としては、例えば相談事業があります。訪問相談をして家庭を訪れ、ひとりで引込みがちな老人の相談相手になってやることです。中にはグチを聞いてやる必要もあります。また新しい知識、最近の社会情勢、経済の動向、町に起きたいろいろの事件、新しく開発された道具・機械、最近発行されて人気のある本の紹介などいろいろの問題を解りやすく説明してあげたり、質問に答えてあげたりする仕事があります。そのためには、常に新しい知識を身につけるよう努力しなければなりません。

また、その老人のために料理をしてあげたり、掃除、洗濯をしたり、入浴を手伝ったり背中を拭いてやったり、また外出の時に一緒に付き添って行ってあげたりの仕事もあります。こういうことができない人には、電話で相談を受けたり、おしゃべりをしたりして孤独の解消につとめる仕事もあります。

- d) 老人クラブを積極的に作って、その運営に当っては、老人だけでなく社会の人もあたたかく見守ることが大切です。

老人クラブは、老人自身のクラブですから会員以外の人のみだりに入り込んで運営に参加してはなりません。老人クラブの重要性については社会の人々も十分に認識し、これに対して協力する姿勢を持つことが大切です。

最近の東京の学校は、単に学校教育の場、或いは社会から隔絶された生徒と先生だけの教育の場という考え方ではなくて、社会に開かれた地域社会の学校というように

変わってきました。そのために、まず高い固い塀はなるべく取り払って、中が見えるような垣根にしたりして社会との断絶をなくすようにしています。また、生徒が休みで学校を使わない時には、なるべく学校を開放して市民や老人に校庭やプール、体育館、教室を貸すようにしています。つまり、学校教育と社会教育をあわせ持つような学校に生まれ変わりつつあります。勿論、主体は生徒の教育ですから、これに支障があってはなりません。ですから便所の改装、出入口の改修、建物の管理面の改変などこれ迄とは違った努力や出費も必要になりました。そして、単にプールとか校庭という「物」を貸すというのではなくて、学校が持っている高い教育・教養を市民や老人にも提供しようというのがこの目的なのです。

そういう意味で老人クラブもやがては、これを老人以外の市民にも開放して、老人が講師となって踊り、民謡、園芸、俳句、短歌、茶道、華道、書道、工作などの教室や講習会ができるようになりたいものです。要するに、老人だけが集まってしゃべったり、遊んだりしているクラブではなくて、社会の中で生きているクラブであるという自覚を持つと同時に、社会の人々もそれに興味と関心を示し、クラブの活動に協力するようになって行くべきです。

- e) おとしよりは、若い時に比べれば当然身体が弱ってきていますから、老人を優先させるような場所や坐席を作って、老人がなるべく社会に出やすいようなしくみを作り出してゆくことが肝要です。

例えば、バスや電車でシルバー・ノートを設けて老人専用であることを示すために色を塗り変えるなどして楽に坐ってゆけるような席を設けることも必要です。これは老人が立っているのがつらいからというだけでなく、坐って行けるという安心感を与えることにより、おっくうがらずに表に出て行きやすいようにすることと、社会の人々も老人になるべく席をゆずって、老人を社会の一員として迎え入れようとする積極性を示す効果があります。これに対して老人は、当然であるというような顔つきをせず、社会の人々に感謝の気持を持つことが大事です。

以上、おとしよりと社会との関係、おとしよりの落ち入り易い傾向についていろいろと話して参りましたが、私の講演を終えるに当ってこれ迄申し上げましたことを要約してみたいと思います。

まず第一に、年をとってからの生活を進めてゆくために老人問題を研究したり、積極的に自分の知恵を生かして自分の体力、趣味、経済、家庭に合った無理のない生活目標を作って、その目標に向かって努力して行くことが肝要です。

次に「老後」という何となく暗い、しめっぽい考え方を捨てて、老年生活それ自身に人生の意味を見つけて、「残りの人生」という考え方を捨てていただきたい。

第三には、生き甲斐を見つけることが大切です。これは、一人一人違いますから誰と相談し

ても結構ですが、自分の生き甲斐は自分自身が決めてそれを大事にすることです。そのために自分の趣味や関心を拡大したり深めたり、更には新しい学習、勉学、見学等をどんどん進めていきたいと思います。

第四には、若い人と努めて話をしたり、一緒に参加できるような機会を見つけて共に楽しみ、共に苦勞することが必要です。老人だけが集まって若い人の未熟性をののしったり、お互いにグチを述べ合っただけばかりしては、老年生活そのものを自ら暗いものにしてしまうばかりでなく、若い人との接触を自分から絶ってしまいます。社会からともすると逃避しがちな老人の特性を良く見極めて、なるべく社会の人々と接触できるような機会を見つけることが大切であります。

最後に、自分は年をとったのだからもうこれでいいのだと、自分で自分の向上心をおさえてしまっただけです。講習会、研究会が開かれたり、展示会、講習会が開催されたならば、無理のないように出かけてなるべく新しい知識や考え方、違った感覚に接するように努力することです。

以上長々と申し上げましたが、暗い老年生活にするか、それとも積極的な生活にするかは、皆様方自身の心がけて決まることです。そして、社会は皆様方が明るく努力される姿に敬意を払ってくれるはずで、これからも、ますます健康で充実した生活が開かれますよう心からお祈り申し上げて私の講演を終らせていただきます。御静聴を心から感謝申し上げます。

3. 各地講演会質疑応答

各地で講演会を開いたが、講演会終了後、質疑応答の時間をかなりとった。それは、話しを一方的に聞くだけでは老人問題の解決にはならず、自分も発言し積極的に話してみようという機会を作らなければ、自分の老年生活の目標を自ら作るができないからである。そこで、ここでは質疑応答の中で参考となるものを取りあげてみた。

Q 老人クラブの会長の任期が長くなり過ぎてワンマンになっている例がありますが、どうしたら良いでしょうか。

A 老人クラブの会則を作る時に、会長の任期を必ず決めておくことが必要です。三選、四選になると、どうしてもワンマン体制になり易いし、また会員もあの人に任しておいた方が気が楽だと思って、自分達の会だという意識が薄くなってしまいます。大体再選までで、これはという人をつぎつぎに見つけて会の運営を皆でやるように心がけるべきです。殊に、婦人の会長の増やしていくようにしていただきたい。婦人の社会参加と男女平等という民主主義の原則が老人クラブの運営にも明らかにした方が良いと思います。

Q 老人クラブの会長はどうあるべきでしょうか。

A 会長の役割りは二つあります。そのひとつは、老人クラブを代表する機能と顔であり、もうひとつは老人クラブを事務的、合理的に運営してゆく役割りです。老人クラブは、

老人だけのささやかな集いを越えて社会の新しい要望に答え、社会の構成員としての資格を得つつあります。そこで会長は、この動向を良く理解し、二つの役割りを十分こなせるような努力をする必要があります。

Q 老人問題や老人の医学、心理についての勉強は外国ではなかなか難しい。日本ではどのようにしているのか。

A 日本でも、まだまだ老人問題についての研究は十分ではありません。医学、心理学等各方面の研究が行われ体系づけられつつあります。また、老人問題についての専門的な研究機関や講座も各地で作られています。そこで、いろいろの講習会を開いて専門家を呼びその話を聞いたり、手紙や電話などで質問して答えて貰ったりしています。また会報に専門家に寄稿して貰って皆で読んで知識を増やすよう心がけています。そこで、日本のようにはゆかないかも知れませんが、大学や市当局と話し合っって良い講師の派遣を相談してみたらどうでしょうか。言語の違いその他で最初は苦労があるかも知れませんが、努力してみることです。

Q 老人クラブの運営は中々大変だが、日本ではどこから補助を貰っているのですか。

A 老人クラブは、建て前から言うとその会員の出す会費で運営されるわけですが、日本では、老人クラブの必要性、重要性を社会的に認め、主として地方公共団体が補助をしたり、会場を安く提供したりしています。外国では日本と同じようにはできないと思いますが、いろいろ工夫してやってみて下さい。慈善団体や地域団体の力を借りるのも一方法だと思います。また企業を持っている会館、体育館を借りる方法もあります。しかし、補助はあくまでも全体の一部であって、老人クラブの運営の主体は会員の提供する会費と労力です。

以上のほか、次のような質問や要望があった。

- 日本の老人クラブでは、婦人の会長はどのくらいいるのですか。
- 日本では何才から老人というのですか。
- 日本とブラジルでは、老人クラブの運営の仕方にどういう違いがあると思いますか。
- 老人クラブの活動事業として、授けたり老人の世話を入れてもいいでしょうか。
- 老人クラブの会員が町や道の清掃をすると、「仕事を取られてしまう」と言って清掃のパートの職員に叱られてしまいます。どうしたらいいでしょうか。
- 老人問題について参考になる本を、是非送って下さい。
- 老人クラブを運営するための貸金を日本から補助していただけないでしょうか。
- 毎年1回講師を派遣していただいて感謝していますが、今後は年に2回ないしは3回程派遣していただきたい。
- 老人センターや老人会館を建設する時に、物心両面にわたって協力していただけないでしょうか。

- 植物人間という言葉が耳にしますが、それはどういう意味ですか。
- ブラジルでは年をとると、親夫婦と子供夫婦は別々に暮らす傾向にある。しかし日系人は、とにかく一緒に暮らしたがる人が多い。この違いをどう思いますか。
- ゲート・ボールの機器とルールブックをぜひ送って下さい。
- 日本の老令年金をわれわれ日系一世にも支給できるようにしていただけないでしょうか。
- 海外にいるわれわれ日系老人にも、日本の社会福祉の恩典にあずかれるような道を切り開いていただきたい。
- 日本では、老人医療の無料化が開始されて、病院や医院に行く老人が大変増えたと聞いていますが、現実はどうなっているのですか。このことは、老人にとって喜ぶべきことなのか、それとも悲しむべきことなのでしょう。
- ペルーには、はっきりした老人クラブがまだ生まれていません。そこで老人クラブの作り方、運営の仕方について教えて下さい。
- 老人クラブを作っても、それぞれの趣味や関心が違うので、小さな集まりをあちこちでやらなければなりません。この場合、日本ではどのような施設や場所を使っていますか。
- ブラジルのサンパウロ郊外にあるランバ日本人会館で老人クラブ研修会が開催されたが、その時参加者を五組に分け、佐藤講師から次の五つのテーマが出された。それぞれ分団討議をし、熱心に議論して一つの結論を出した。
 - (1) 老人クラブの会長と役員には、婦人がもっとどんどん出てやった方が良いか悪いか。
 - (2) 老人クラブの運営について、資金面の強化をはかるためにはどうしたら良いか。
 - (3) 老人クラブの会員が支払える会費は、月額どのくらいが適当か。限界はいくらぐらいか。
 - (4) 外部の講師を呼んで来るには、どうしたら良いか。
 - (5) 外に出て見学会を開くには、どんな支障があるか。

あ　と　が　き

私は、国際協力事業団の要請を受けて約1カ月弱、ブラジル、アルゼンティン、ボリビア、ペルー4カ国を回り、老人問題について20回程の講演と座談会を終えて帰国した。事業団が講師を派遣した理由は、現地の日本人会や老人会の強い要請にこたえるためと、戦前戦後を通じて移住した人々の中で日系一世の人々が70～80歳に達する人が多くなり、いわゆる老人問題が顕在化しつつあるので、外国に居住している日系一世の老人問題を正しく把握してこれを分析すること、彼らの疑問や質問に対して専門的にこたえて少しでも不安を解消すること ― こういった必要を事業団が、いち早く察知したからだと思う。

講師団の派遣は、何も今回が初めてではなく、1978年（昭和53年）から開始されて今回で5回目になる。しかも、この事業の必要性和意味は年々高まると同時に、この事業の果たす役割りと期待が少しずつ変化しているように思う。それは、現地の人々と調査団が接触している期間だけのいわば一過性の問題ではなくて、帰京後も解散したとはいえ、調査団が日本国内において果たす仕事と現地の人々との交流とが常時なければならなくなってきたように思う。現実には、現地から私の手許に手紙その他で質問や要請がきているし、日本国内でも現地の話聞かせてほしいという要請がある。従って、この事業は臨時的な仕事ではなく常例の仕事になりつつあるし、現地の人々もそれを強く期待しているように思う。

9月は、日本の敬老の日因んでブラジルのサンパウロ市を中心に、毎年盛大な老人週間の行事が（日系人社会で）展開されているが、その中でも2日間にわたって行われる大講演会がこの週間のメインイベントになっている。100キロも500キロも離れた遠方から3千人もの日系一世が泊りがけで集まってくるので、1,500人収容の会館で一度でさばききれず、2日にかけて講演会を行うほどであった。日本でもこれ程活気に満ちた老人集会は珍しいくらいである。

明治41年笠戸丸が神戸港から781人の移住者を乗せ、43日を要してサントス港に接岸したのが、日本からのブラジル移住第1号といわれているが、その中の僅かな生存者の1人である金城山戸（きんじょう・やまと）さんが90歳という老齢にもめげず、会場に入った私を温かく迎えてくれたことは大きな感動であった。

今回私が回った各地の集会は、このように大きな講演会だけでなく、老人クラブの指導者たち100人程の会、奥地の移住地で開かれた20～30人の老人会などがあり、多彩な講演会であった。かなりハードスケジュールではあったが、講師は私1人で講義内容の相互調整などの手間が必要でなく、また事業団から同行された移住事業部の半谷良三さんがいろいろと配慮をしてくれて2人だけの気を使わない旅であった。そのうえ、現地では事業団の支部、総領事館、日本人会の方々が私共が恐縮するほどに気を使ってくれて、何ひとつ不自由することはなかった。改めてお礼を申し上げたい。

4カ国を回ってみて、戦前派の多いブラジルのように老人問題が既に顕在化し、任意団体とは

いえ自力で老人ホームを経営したり指導者を日本に派遣して専門研修を受けさせたりして問題処理に当たっている所と、戦後計画的に移住したボリヴィアのようにこれからの問題として不安に思っている所とがあり、一様ではない。

しかし私が接した限りでは、老人達の要望は大ざっぱに言って二つに大別される。その一は、日本の老人と同様の年金、医療の受給と特養、養護老人ホームの建設に努力してほしいという強い要望であり、他は、日本の国政の及ばない外国であるので日本の老人と同様にしてほしいとはいえないが、老人問題に関する資料の送付、老人会館建設の一部補助を要望するものであった。

日本の老人が受給しているのと全く同様の施策を要望する声は、全体としては多くないが、主張する老人は信念としてこの要望を持ち、自分の主張の正しさを情熱を持って訴えてきた。私は今回たくさんの老人達と話し合ってきたが、この主張との対談に一番時間をとられエネルギーを費やされたような気がする。この程の主張と考えを持っている人はどの国にもいたが、何れも少欲派であり、それだけに声高に私に対して自分の主張の正しさを認めさせようと力強く訴え要望したように思う。

ボリヴィアのサンタ・クルスで、或る老人とこの問題で長時間の議論になった。ここはボリヴィア国であるのに日本国民の権利を主張するのはおかしい。かりにこの種の施策が実施可能となったとしてもボリヴィアにいる日系人にだけ受給を開始するわけにはいかない。世界中に散っている同様の日系老人全部に老人福祉施策を施すことはどう考えても不可能である。それぞれの国には主権がありその主権に基づいて国政が行われているのであるから、それを尊重するのが国際的近代人の生き方ではないだろうか — と、まあこんな論理で話をしてみた。人生経験からいうと私よりはるかに先輩であり多くの苦勞をしてきたと思われるこの老人は、最初こそ頑として私の考えを退け、日本の国策にそって自分達は行動してきたのだから、日本の老人と同等の権利を持っていると主張していた。しかし話し合っているうちに、しだいに私の考えに近づいてきてくれた。

私は、日本の老人とボリヴィアのこの老人との間に決定的な違いが一つあると思った。それは日本の老人は新聞、テレビ、ラジオ、各種の講習会や会台等に恵まれていて、たえず社会教育を受けていることである。しかも、老人同志の会合だけでなく、スポーツ、社会運動（消費者問題、公害問題、福祉問題等）、レクリエーション等を通して年齢や性をこえていろいろな人と接触する機会が多く、新しい知識や情報に恵まれている。従って、自分の考えや人生観をたえず修正したり、自分が気がつかなかったことに感動したりすることができて、思想的にも感情的にも「若い老人」として生きていけることができるようになった。これに反してサンタ・クルスで議論したこの老人は、情報や刺激に乏しく、自分の考えの正しさを確認する手段を持っていない。また社会教育の講座も少ないというよりも殆んどないため、自分の考えを修正したり新しい考えを吸収することができない。

こういう違いのために、日本にいる老人は経験や実感こそ少ないが国際的視野を持てる機会が

多い。そういう意味において、海外にいる日系老人に対しては、老人問題についての情報、講演、技術指導、指導者養成等にこれ迄以上の努力をすると同時に知識、教養、レクリエーション、スポーツ等を得たり参加したりする機会を与えるために各種の社会教育、社会体育の講習会を開催したり情報提供事業を進める必要がある。老人を「老人として遇する施策」と「市民として遇する施策」が必要である。

私は、各地を回って必ず最後に姉妹都市関係を結んでいる日本の都市の社会福祉協議会、老人クラブ連合会と接触して、「老人の市民外交」を積極的に展開してほしいと要望したが、この提案は深い関心をひいたようである。手紙のやりとりから始まって情報や資料の交換、はては代表者の相互訪問、ゲート・ボール大会の開催等夢はつきない。思慮深い老人パワーが市民外交を通じて国際親善の一端を果たしてくれたならば、これに過ぎる喜びはないし老人達も大きな生きがいを感じるに違いない。ブラジルのロンドリーナ、アルゼンティンのフェノス・アイレス郊外のウルキノサ地区では二世、三世の若い人々が老人問題をかなり正しく理解し、老人会の運営について出しゃばらないよう思慮深く協力していたが、彼らは「老人外交」を積極的に進めたいと発言し、私に帰国してからの協力を切に求めてきた。

老人会、老人クラブでは、確かに老人自身の会でありクラブであるから、その構成員や運営は他に依存しないで老人だけでやるべきである。しかし、老人問題は老人だけの問題ではなくて、老人の社会的問題であり市民的課題でもある。そういう意味において、老人会や老人クラブの活動に理解を示す市民が一人でも多い方が良いし、その運営について知恵と協力を提供する市民が多いことは、老人会や老人クラブが単に老人だけの集いではなくて、市民的活動にまでなってきた証拠といえる。「とし寄りが何かやっている」というような状態では、老人問題を解決することは難しい。

奥地に主として農業従事者として戦前に移住した一世は、開拓時の苦勞の期間が長かったために開拓そのものに生活のすべてを費したと云ってよい。従って、現地の文化を享受する余裕がないままに今日にいたって、現地語の新聞やテレビに馴染めないでいる。これに反して二世、三世はポルトガル語、スペイン語で育って日本語は不自由である。しゃべることはできても、漢字を書くことができない人が多い。また現地人の友人を数多く持ち、日本を実感として祖国だとは思っていない。そこで、日系一世の今の老人問題と将来の日系二世、三世の老人問題とをわけて考える必要がある。

ブラジルのポルト・アレグレ市で老人ホームを見学したが、ベッドの高さが日本人には少し高いように思えたし、小じんまりした清潔な礼拝堂があったが、カトリック信者でない日系老人はどうするのかと不安になった。また、ロビーにはテレビが置かれて何人かのおばあさんが集まってテレビを見たり、おしゃべりをしていたが、ポルトガル語で放映されるテレビを理解したり、老人達の会話の中に日系老人が自由に介入のかと思った。おそらく、二世、三世が老人になった時はそれらは可能であろうが、一世の日系老人には無理のように思えた。

10月初めの日曜日、サンパウロ日伯援護協会の小畑事務局長に案内して貰ってサントス港を訪問した。潮の香りのする活気のある町であった。日本からの移住者がブラジルにおける第一歩を印したサントス港のかつての「移民の家」が身寄りのない日系老人のための「厚生ホーム」に姿をかえて生き続けており、50人程が収容されていた。神戸で仮りの養子縁組をして、ここで別れてそれぞれの道に散って行った人もいるという。しかし、多少の不安はあったとしても、この移民の家を出る時は若い人生で力があふれていたであろうし、胸をふくらましてここからアマゾンその他に散っていったに違いない。しかし、不幸にして身寄りを失い、人生の最後を再びここで終えようとしている日系老人を前にして、私は講演をしながら心の中で何故か落涙を禁じ得なかった。日本とつながっている海を目の前にして、彼らは私たちの温かい手を待っているに違いない。彼らの目は、老いたりとはいえ開拓者のそれであり、澄んで輝いていた。ニコニコ笑っている顔の中の少年のような若い彼らの目を、私はいつまでも忘れないうる。

JICA